

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

酒井仁
表紙 池田靖宏



無敵の**姫**騎士が
ドMに目覚めた
ようです外伝

南国・常夏・ビーチで
ドッキリドM騎士!

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです外伝
南国・常夏・ビーチでドッキリ、ドM騎士！ 前編』
『無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです外伝
南国・常夏・ビーチでドッキリ、ドM騎士！ 後編』
に基づいて作成しております。

※本作はあとみっく文庫『無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです』（キルタイムコミュニケーション・刊）とともに読みいただきますと、より楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



無敵の**姫騎士**が
ドMに目覚めた
ようです外伝

南国・常夏・ビーチで
ドッキリドM騎士!

酒井仁

表紙／池田靖宏

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

ローゼリア＝フロンケット

フロリアナ王国第13王女にして無敵の姫騎士、だがその実態は騎士道の修行を何か誤解しているDM王女。

パセラ＝アングルス

ローゼリアの従者にして小姑のように口やかましい魔導師。ローゼリアを懲らしめるため呪いを会得した。

謎の魔導師

南国リゾスタを滅ぼそうと企む魔導師。

コーティ

謎の魔導師に召喚された淫魔。

山賊たち

魔導師に囚われたあらゆる者たち。

ザザーン……ザザーン……。

打ち寄せる波に陽光がはじけ、じりじりと灼けた砂浜はダイヤモンドのように輝いている。

見渡す限り広がる波打ち際では子どもたちが無邪気に遊び、はるか沖合では日に灼けた若者たちが波乗りに興じている。

ここ、リゾラスタビーチは南国リゾラスタでもっとも有名な観光地である。

気温は高いが空気は乾燥しており、温暖な気候は多種多様な果実を育てるのに適している。事実、リゾラスタ産の果物は、豊かな海産資源と共に重要な輸出品物である。

この肥沃な土地が平和な楽園であるのには、もう一つ理由がある。

隣国であるフロリアナ王国と友好関係を築くことで国を守護してもらい、その見返りに豊富な資源を優先的に王国に供出しているのだ。

ゆえに、フロリアナとリゾラスタの友好は、何にも増して重要な外交と言える。

「あら……その色とりどりで美味しそうなものはなんですの」

日差しの元で氷菓を売っていた男は、声をかけてきた金髪女性のあまりの美しさに目をまん丸にしたあと、相手を崩した。

「こいつありゾラスタ名物の蜜氷さ、甘くて冷たくて美味しーいぜ」

「まあ、氷なのね？　こんな日差しの元で食べる氷菓子だなんて、素敵だわ」

「嬢ちゃんは別嬪さんだから、一杯サーブスしてやるよ、そら」

器に細かく削った氷を盛り、蜜と果物を盛りつける間も、男の視線は見事な巨乳の谷間から外すことができない。

豊満な乳房とヒップを包むのは黒のビキニ水着。くびれた腰やむちむちの太ももを惜しげもなくさらけ出したボディライン。

完璧な肉体に少しを引けを取らないのはその美貌。アメジストの瞳と通った鼻筋、黒の水着が肌の白さを際立たせる。

美少女は、にこりと蜂蜜のような笑みをこぼし、氷菓子を受け取る。

「ん……とっても美味しいですわ、まさか南国リゾスタで、こんな冷たくて美味しいお菓子が食べられるなんて」

「もちろんさ！　うちの氷は地下から組み上げられた上質の井戸水を、オレさまの氷結魔法で凍らせた特製の氷だからね」

「美しいお嬢さん、ボクにリゾスタ名物ヤバキソを奢らせて下さいませんか。ピリ辛でたいそう美味ですよ」

ふと見ると日焼けした青年が、美味しそうな焦げ目の付いた麺料理の載った皿を持っていた。

その向こうでは火焰魔法で鉄板を加熱している魔導師の姿。昨今、魔物の減少と共に学

ぶ者の減った魔導職だが、この辺りでは氷結魔法や火焰魔法をこんなふうに使っているらしい。

「あら素敵ですわ〜ッ。迎賓館の料理とはまた趣の違う、野趣溢れるお料理」

「迎賓館？」

「いえいえ、まったくもってこっちのお話ですわ。あら、なんだか急に人ばかりが」

「お嬢さん！ お、オレたちが波乗りを教えてやろうか？」

「砂でお城を造るコンテストがあるんだけど、見に行こうよ」

先ほどの美青年を押しつけるように、たちまちわらわらと美少女を取り囲む男たち。

さもあらん、並み居る水着美女の中でも群を抜いて目立っている、完璧なプロポーションと美貌を誇る、金髪巨乳の美少女。彼女こそはフロリアナ王国が誇る無敵の姫騎士。

いかなる魔獣をも優雅な剣さばきで打ち倒す、負け知らずの剣士、ローゼリアIIフロンケットその人であった。

（ああ……最初にこの国に来たときは、パセラに騙されたと思ったけど、やはり来て正解だったわ）

香ばしい炒め麺を頬ばりながら、思う。

王室から南国リゾラスタを訪問するよう命じられたときは、てっきり魔物退治か何かだと思っていたのだ。

ところが、蓋を開けてみれば名目は親善友好大使、その実態はきれいなドレスを着てにこやかに微笑み、外交関係者と握手や談笑をするという、世にも退屈な仕事だった。

「あつたりまえでしょ。きょうび魔王もいない平和な世の中、大事なのは国と国との友好的なおつきあいなの。あんた、外見だけは完璧なんだから、おとなしくお人形さんして下さい」

黒髪で小柄な従者、パセラⅡアンクルスはにべもないが、その言い分はもつともだ。

魔王は不在、魔物が出現することも滅多にない。そんな時代に無敵の姫騎士などはあまり存在意義がないのだ。

「お勤めをすることに異論はないのだけれど、さすがに三日連続、朝から晩まで立ちっぱなしで愛想笑いを振りまくなんて、パセラの悪意を感じずにはいられないわ……パセラに恨まれるようなことをした覚えはないのだけれど」

ローゼリア本人には覚えがなくても、忠実にして有能な従者にはある。気ままなローゼリアに振り回され、迷惑をかけまくられた覚えは一つや二つではすまない。

「ま、過ぎたことはしょうがないわ。いまはこうして念願の海を満喫しているんですもの」
目映ゆい日差しに目を細めて、海と空の蒼を眺めていると、何やら派手なのぼりを持った男が大声で何かを告知し始める。

「えーっ、お集まりの皆さん！ ただいまよりリゾラスタ商工会主催、『真夏の宝探しゲ

「ム」を開催いたします！ 賞品はたっぷり用意しておりますが、恐ろしいモンスターに襲われる危険が待ちかまえているかも！ ドキドキのイベントにふるってご参加下さあ〜いッツツツ」

途中まで聞くとともになしに聞いていたローゼリアの目が、商工会会長の言った「モンスター」の一言にきゅぴーんと輝いた。

「こんな美味しい氷や食べ物だけじゃなく、魔物退治までできるだなんて……これは参加しない手はありませんわ！」

「お嬢さんが参加するなら、ぜひオレも！」

「オレも、お嬢さんを守るナイトになるぜ！」

ローゼが参加すると聞きつけたナンパ男たちが、我も我もと参加を表明する。

「では皆さん、共に戦い抜きましょう。ああつ……パセラの目を盗んで抜け出してきて、本当によかったッツツツ」

姫騎士が感無量の声を上げたところ、リゾラスタ迎賓館の一室からは、世にもおぞましい呪詛の叫びがあがっていた。

「あんのつつつ！ ドクソボケナス王女があああああ〜〜〜ツツツツツ！！ 呪うッツ！ 今度こそツ、ほんつつつとうにツツ、呪いッツ、呪い殺す〜〜〜ツツツツツ」

まんまと親善大使のお役目から逃げ出したローゼリア王女への殺意をむき出しにした、

侍女パセラの雄叫びは、無論届くはずもなかった。

有能な従者にして、地水火風全ての属性魔法を使いこなす魔導師でもあるパセラIIアンクルスは、意外なことに「呪い」のスキルを持っていない。

その理由は明瞭にして簡潔、「敵を直接ぶちのめさないと物足りない」という物騒な理由である。

そのパセラが呪術を学びだしたきっかけは、やはりというかローゼリア。

勝手に魔王退治の旅に出たローゼリアは、旅の資金としてパセラの虎の子のへそくりをこっそり持ち逃げしたのだ。

（あのバカ姫のデタラメ剣にはあたしの攻撃魔法が効かないけど、呪いまでは斬れないでしよ）

ローゼリアの迎賓館脱走を知ってからきっかり半刻。おどろおどろしい室内に準備された鍋の中に、黒髪の従者は怪しげなものを放り込む。

「漆黒の翼、暗闇に潜む禍々しき死者の嘆きよ、我が手に集え……我が怨みを呪いの蜜と化し、怨敵に苦難と不幸をもたらしたまえ……」

ぼふうつ、黒煙が舞い上がり、刺激臭が広がっていく。

ローゼリアとパセラは主人と従者である前に幼馴染みでもあるのだが、いまのパセラは

いままで味わわされてきた怨みつらみに支配されている。

「けっけっけっけ！ この温厚で我慢強いあたしをここまで怒らせたことを後悔するがいいわ！ さあ、いよいよ仕上げよ……」

恐ろしい呪いの儀式の最後の呪文を唱えようとしたときである。どんどんどん、とドアが激しくノックされた。

「いかがなさいました！ この臭いに煙……火事ですか？ すぐに人を呼んできます、ここをお開け下さい!!」

「げうっ！ い、いでえッ、舌噛んだッッ？」

呪文詠唱が終わる寸前、ノックに驚いたパセラは咳き込み、舌を噛み、唱えるべきはずだった呪文を読み違えた。

ゴゴゴゴゴゴ……完成するはずだった儀式を中断された鍋が無気味に唸り出す。パセラは慌てて火を消して鎮めようとするが、呪いはパセラの意図とは違う形で完成されてしまっている。

「ヤ、ヤバイ………この呪いは」

苦難と不幸がてんこ盛りでローゼリアに押し寄せてくるはずだった呪い。

だが実際に完成されたのは、世にも恐ろしい「迷い子の呪い」であった。

「うわああああッッ！ あ、あのボケ女、一生帰ってこれなくなっちゃった……ッッ

ッ」

へたり込むパセラの背後で、ドアノックはますます激しくなっていた。

「あら……？ 皆さん、どこに行ってしまったのかしら」

ふと気づくと、ローゼリアは見知らぬ洞窟に一人佇んでいた。

坑道なのか、岩壁に発光石が埋め込まれ、人が使用している痕跡がある。だがいまは音も気配もまったく感じられない。

ついさっきまでたくさんのナンパ男たちに囲まれ、和気藹々と「真夏の宝探しゲーム」を楽しんでいたのだが。いつの間にかやらたった一人でこんなところに迷い込んでいたのだ。「まあまあ、皆さん揃って迷子になるだなんて、困った方たちねえ。ま、そういうアクシデントあってこそその冒険ですわね」

明らかに迷子になったのはローゼリアのほうなのだが、そんな些細なことであらうたえる無双の姫騎士ではない。

本来なら楽勝で勝てる魔物を相手に、「修行」と称してわざと襲われ、いつしか苦痛が快感に変わっても「いい修行ができましたわ」とにっこり微笑むのが、ローゼリアである。「まあ、この辺を探索していれば、どなたかに出会えるでしょう。ひとまずこの洞窟の奥にでも行ってみましょう」

呑気につぶやくローゼリアの腰で長剣がしゃりんと揺れる。

黒ビキニに帯剣とは妙な格好だが、商工会会長の「モンスターがでるかも」というジョークを真に受けたためだ。

「宝探しゲームは楽しいけれど、いっこうに魔物がでる様子もないし、別に剣なしでも良かったのかしら……ムッ、女性の声？」

がりがりがり……と金属が擦れるような音が洞窟の奥からかすかに聞こえ、それに続いて「た、助けてッ」という女の悲鳴。

きりり引き締まった顔になるや、ローゼリアは姿勢を低くして駆け出す。

程なく見えてきた洞窟の奥は開けていて、そこに巨大な金属製の檻が設置されていた。

「いやあっつ、よ、寄らないでええっ」

檻は仕切りによって分けられているが、その仕切りが巻き上げ装置によってきりきりと吊り上げられていく。

その一方にはうら若き女性、そしてもう一方にはうす茶色でぶつぶつの皮膚に覆われた、醜い怪物が唸り声を上げている。

大きなぎよる目に体型はいちおう人型をしているが、背は曲がり、指の先には鋭い爪が光る。

「まああゝっつ！ 本当に魔物と遭遇するだなんて、なんてラッキーなのかしらッ」

「うふふふ……これは真剣勝負なのでしょう、コーティちゃん。これではわたたくしの一方的な勝利ですわよ」

「あ、あんっ、そこはお尻の……ふわあああっ！」

くりくりっ、と指の腹で菊門をくすぐられた淫魔少女が、ぶるるっ、と痙攣する。

その反応を見届けもせず、もう一方の手を前から股間に潜らせると、可憐な花びらをクチュクチュとかき回し、淫蜜を指にまぶしつける。

「あらあら、まるでお漏らししたみたいですよ。このローゼリア、憚りながら勝負と名の付くものに遅れを取ったことはありませんのよ」

「ふああああ、お、おねーさまあ〜」

ただでさえ魔物の気配を読むことに長けている姫騎士、しかも勝負という言葉に異常興奮したローゼリアは、完全に淫魔少女を手玉に取っていた。

小柄なサキュバス少女は、いまや姫騎士の腕の中で淫らかな声を奏でる楽器も同然。

巧みに蠢く指使い一つで嬌声を上げ、ぷるぷるとアクメに身をふるわせ、愛撫されるがままに悶えよがる。

「ふひひいんっ。こ、こんなきもひいひいの、初めてれすううっ。お姉さまあ、コーティ、またイツちゃう、ひっ、いく、いくうううっ」

びくんっ、びく、びくうううっ。



何度エクスタシーに達しても、ローゼリアの愛撫は止まらない。

アヌスとヴァギナを同時に指責めしながら、愛らしい胸の突起を口に含んでは小指の先に満たないニップルを舌で転がし、吸引する。

「ふぎいいいつ、お乳ッ、お乳感じる、うううっ！」

「ふふ……わたくしも少し気持ちよくさせていただきますわよ。さ、お股を広げて……」
股間を黴っていた両手を引っ込められ、コーティは少し残念そうな顔を見せる。

だがローゼリアの手が淫魔の股を広げ、そこに姫騎士の股間が接近してくるのを見ると、期待に顔を輝かせる。

「あ、ああ……お姉さまのおま〇こがあたしのおま〇こにキスしてくるうううっ」

くちゅ……ちゅぶっ。互いの股を挟み込むような格好で、ローゼリアとコーティの乙女の花弁が密着すると、湿った音が響く。

ただでさえさんざん愛撫された花卉にローゼの肉ひだが擦れると、淫魔少女はそれだけでびくびくとアクメの痙攣に包まれる。

「ん……ん、はあんっ。コーティちゃんのぬめぬめのびらびらと、わたくしのびらびらが擦れて、密着して、絡みあってますわ……ッ」

「あひ、はひいいいつ。お姉さまあ、きもちいいいつ、きもちいいのおお……ッ」
「ぶしゃっ、ぷしっ！」と噴き上がる透明の液は、淫魔娘の潮。

舌を突き出し、白目を剥いたその顔は、すっかり悦楽に染まっている。だが、姫騎士の顔も紅潮し、丸い肩が興奮を押し隠すようにこわばっている。

性交のような膈への充実感こそないものの、十分に敏感な肉芽同士を擦り合わせるの、まぐわいとはまた違った快樂と愉悅をローゼリアにもたらしめている。

「ふぎいつ、ふひつ、ひいひいんつ。おねつ、おねーさまあゝッッ、コーティのおま
○こ、おま○こおかひくなつちゃうう」

「ええ……わ、わたくしもとつても気持ちよくて、こ、腰が止められませんかッ。で、でももうあと一歩、あと一歩が足りませんの……ッ」

快感は十分すぎるほどなのだが、初めての同性同士のまぐわいにローゼリアは戸惑うばかり。

熱い眼差しで見つめあい、舌を絡めていると、ローゼの巨乳に頬ずりする小悪魔のヒップで黒い紐のようなものがくねる。

「お、お姉さまも、あらひと一緒に、イ、イッてくらひゃ……いつ」

「んひゃんつ！ 何かがお尻をくすぐって……あ、ああ、らめれす、そこは、ふわあああッッ」

逆ハート形をした淫魔の尻尾の先端が、くりくりとローゼのアヌスに果敢に攻め込んでいる。

魔族の尻尾にはペニスほどの太さはない。だが、自在にうねりながら先端で括約筋をこじ開け、うねうねと直腸内を刺激し始めたのだ。

「あひいっ、はひ、ひいいっ、っ。お尻の穴ほじられてますう、熱いッ、熱くて感じるうう」

「こつちも開発済みだなんて、さすがはお姉さまですう。あん、尻尾の先からお姉さまのおケツの熱さが伝わってくるううっ」

最初の愛撫勝負はローゼリアが有利だったが、コーティの尻尾によるアヌス攻撃によって、勝負はほぼイーブン。

巨乳をコーティの顔に押しつけるように抱きつくと、ローゼの甘い体臭で淫魔娘はびくびくふるえ、直腸側からの刺激が膣穴に伝わると、姫騎士は金髪を振り乱して悶え狂う。

「はあ、んんっ。コ、コーティちゃん、可愛いお顔でさすがは淫魔ですわ……そ、お尻の中の尻尾のうねりが絶妙で、わたくしどんどん気持ちよくなってしまう……」

「うふふふ、もつともつと感じて、お姉さま。淫魔の尻尾は自由自在、あらゆる角度からお姉さまの腸の中を突きまくれるんですよお」

「あつ、あひ、いっ！」

見た目は幼くとも、齢二五〇を数える淫魔のテクニクはさすがに老練。

ローゼリアとてアナルセックスの経験こそあったものの、縦横無尽に猛り狂う尻尾の攻

撃に、他愛なく悶えさせられてしまう。

「んふ、うふうう……そ、そんなに突きまくられたら、し、子宮のほうにまで振動が伝わって……ンヒインツッ」

「ここら辺かな、くすくす……あんなにお強いお姉さまでも、子宮を裏側からつつかれるのは弱いみたいですね。でもまだまだこんなのは序の口ですよお〜〜ツッ」

「ッ！」

みりみり……みしみしみしっつ。

尻穴がめりめりと同じ開けられる感触に、姫騎士は目を見開く。黒くしなやかな鞭のようだった魔族の尻尾が、いつの間にかペニスよりも太い棒状に変化していたのだ。

「あ、ああ……お、おケツの穴が、ひ、広げられるうう………ツッ」

「魔族の尻尾は動物の尻尾とは違って、魔力でできているんです。だから、いくら激しく突きまくってもお姉さまを傷つけることもないし、こうしていくらでも太さを変えられるんですよ」

「ぐひ、いい……ッ。そ、そんな太いので、け、ケツ穴ごりごりされたら、わたくしッ」
アナルの快感は、排泄の快感でもある。

肛門を無理矢理こじ開けられ、極太の棒で菊門を摩擦されると同時に、腸に充滿していたものが出ていく愉悅なのだ。

もちろん快楽のエキスパートである淫魔が、それを知らぬわけがない。

十分に太さを増した尻尾をしならせたかと思うと、勢いよくそれを引き抜いてローゼリ
アから快美の声を搾り取る。

「んひひひひひひッッッ、おケツ、擦れるッ。擦れて、ああ熱いッ、ケツ穴灼けちゃう
うッッ」

「お姉さままつたらはしたない……でもそんなお姉さまも、ス・テ・キ。じゃあ今度は、ケ
ツ穴を犯しながら、同時にお腹の奥を……ッ！」

一気に主導権を握った幼い淫魔は、にったりと唇を歪め舌なめずりをする。

姫騎士のくびれた腰に腕を回してしっかりと抱き寄せると、自らの薄い胸とローゼの巨乳
を重ね合わせ、首筋に熱い吐息を吹きかける。

「あん、汗の匂いが甘くて最高ッ。さあ、行きますわよお姉さまッ」

「ちよ、待つ、コーティチャ………あああああああ……ッッッッ」

ぐりっ、ぐりゆりゆりゆ……ッッ。

ペニス並の太さになった尻尾が、深々と挿入されたまま回転を始める。

回転運動で肛門肉を刺激すると同時に、かま首をもたげた蛇のようにうねり、ずぶずぶ
つと突き入れられ、ぞぬぬぬつと引き出される。

縦運動と横運動の同時攻撃、それに加えて腸内ではハート形の先端が腸粘膜を通して、

姫騎士の子宮を激しくノックする。

「ふひいいいいいい、あひゃああううううう！ 尻穴ッ、灼けッ、んぐううう、おっ、お腹の奥まで押し込まれて……………イクウウウウ」

びく、びくんと下肢を痙攣させ、強烈なアクメに到達する。半分白目を剥いて舌を突き出すローゼリアの頬に、少女淫魔は愛おしげに唇を寄せ舌を這わせる。

「ああ、なんて素敵なお姉さま。こんな上質の快楽を味わうのは何十年ぶりかしら」
少女も瞳を潤ませ、ぶるぶるとアクメにふるえる。

背中から生えたコウモリのような翼が、快感を示すようにせわしなく羽ばたいていた。

乙女と乙女のガチバトルの主導権は、完全に少女悪魔が握っているように思われた。

だが、少女の首筋に顔を埋めて肩で息をしていたローゼリアの手が、少女の薄い肩をがしりと掴み、コーティはぎよつと身をすくませた。

「お、お姉さま!？」

「コーティ、ちゃん……………まだ、こんなものでは……………わたくしを倒すことはできなくてよ。けれども、そうね。あなたの尻尾は魔力でできているから、肉体を傷つけないんだったわね」

「え、あ、はい」

「ということは……………たとえばお尻の穴から、直接わたくしの子宮をぐりぐりかき回したり

できるんじゃないかしら？」

とんでもないことを言い出す姫騎士に、少女淫魔は目を丸くする。

「そ、そりゃあできることはできますけど」

「わたくしといえど、そんな激しくてエッチな攻撃を受けてしまったら、いまよりもっと気持ちよく、ではなくてよりいっそう試練を受けられるというものではなくて」

「は、はあ」

「そうよ、そうだわ、そうに違いないわ……ここでコーティちゃんとも出会ったのも、試練を求めるわたくしの騎士魂に天が応えたのですわッッ」

がっちりと淫魔の肩を押さえつける姫騎士の目は、完全に据わっている。

騎士の試練と言いつつ、その実ローゼリアの肉体は、より強烈な快感を得られるという期待感が抑えられないでいるのだ。

「さあ、さあさあさあ！ ここっ、これはガチバトルですから！ 存分にわたくしの子宮にキツツイ一撃をお見舞いするのですわあッ」

「そ、そんなにまでコーティを信じて、身を任せてくれるだなんて、か、感激ですうつつ！ い、イキます、この不肖コーティ、お姉さまのケツ穴から愛しの子宮に、ダイレクトアタックをぶちかまさせていただきますううううッッ」

「ドンとこい！ ですわッッッッッ」

にゆるん、と尻尾がうねり、コーティの目が真剣になる。魔族特有の妖しい光を放つその目は、ローゼリアの下腹を透視し、鍛えた腹筋の奥に女の中心を捉える。

「ではッ、いきますッッッ」

「はうッッ!?!」

魔力でできた悪魔の尻尾は、ローゼリアの腸壁を傷つけることなく貫通し、見事に子宮に突き刺さった。

ぼごり、と騎士の下腹が妊婦のように膨れあがり、ローゼは圧迫の苦しみと被虐の愉悅にびくびくと痙攣する。

「ふぎいいいい、しゅごっ、しゅごいの来ましたわああ〜〜ッッ。ああっ、こんな、すごすぎて、お、おかしくなってますまいますうう」

「ああ、お姉さ……ひぎうううッッ!?!」

だが、ローゼの肉体を傷つけまいと集中していた淫魔少女は、尻尾を突き刺す方向にまでは気が回っていなかったらしい。

子宮に入り込んだハート形の尻尾の先は、その勢いのままに子宮口から飛び出し、ローゼの膣を飛び出してしまっていた。

そしてその先にあるのは、密着していた淫魔娘のヴァギナ。淫魔の尻尾ペニスは、他ならぬコーティ自身の蜜壺にまで達していた。

「おほおおおんっ!! お、おま○こに、コーティの尻尾が、コーティのおま○こにイイイッッ?」

すなわち、ローゼリアのアヌスから挿入された尻尾は、そこからローゼの子宮と膣を貫いた後、まるでローゼに生えたペニスのように少女の膣穴を陵辱していたのだ。

「はぎいいい、太いいい、ふつといのでおま○こえぐられるうう……」

「はあ……ッ、これはッ、想像以上のミラクルアタックですわア。あん、お尻の穴と、おま○こが両方同時にごりゅごりゅされてますう……ッ」

「ひぎっ? お、お姉さま、こ、腰を押しつけてこられたら……あひゃひいいいいッッ」
 コーティが腰を引こうとするが、そこは抜け目なくローゼリアの下肢ががちりと淫魔の腰を絡め取っている。

ぐぐううっ、と小さな腰を抱き寄せると、尻尾の先端がずずんと淫魔の子宮に激突する。
 「はひいえええっ、し、尻尾を下がらせ……ら、られないッッ?」

「駄目よコーティちゃん。お楽しみ、いえ試練はこれからなんだから」
 「どひいいいいッッ」

慌てて尻尾を引っ込めようとするも、それも叶わず。騎士の膣は快感に収縮し、撤退を頑として拒んでいるのだ。

「あひ………はひ、い………ッ」

「はふうう、子宮もお尻もパンパンでくらくらしそうですわ。これが……完全本気のラブバトル、なのですね……ッ」

うっとりしながら下肢を曲げ、ぐいぐいと淫魔娘の子宮を突き上げる。

淫魔は己自身の尻尾で騎士を犯しつつ、逆に犯されるといふ倒錯した刺激に声も出せない。半開きの唇から舌を突き出し、虚ろな眼差しを中空に彷徨わせる。

（何これ、こんな快感、二五〇年の淫魔生活でも味わったことがないよおッ。いくらお姉さまが騎士だからって、ただの人間相手に、淫魔のあたしがこんなめろめろにされるなんて）

敗北感はない。

快楽勝負で人間に負けたという屈辱よりも、ローゼリアという美しく、強き騎士と交わっている自分が嬉しくてたまらない。

「お、おねえ、さま……コーティ、しあわせれすう……コーティ、お姉さまと一緒に、いききたいのお……」

キスをせがんでくる小柄な娘を包み込むように抱きしめる。

汗で額に貼りついた前髪を優美な仕草で拭うと、ローゼリアは少女と舌を絡めつつ、囁くような熱い吐息で答える。

「いいですわ、一緒に……一緒に登りつめましょう。だから、コーティちゃんもわたくし

のお尻と子宮、めちやくちやに犯して下さいね」

「は、はいッ」

舌を絡めるキスから、互いの首筋に唇を這わせていく。淫らな芳香を放つ汗をねぶり取る美女と少女の体温が上昇していく。

「ふああつ、お、お尻の穴が、は、外れてしまいそう……ッ」

「お、お姉さまの腰使い、すごすぎですうううッッ。コーティの子宮にガンガンあたつちやつてますうう！」

一ミリの隙間もなく密着した乙女と乙女の肌が、みるみる桃色に上気する。

騎士の尻穴にずっぽりとねじ込まれた太ぶとしい尻尾はあらゆる動きで尻穴を陵辱し、直腸内ではのたうつ蛇のように暴れ狂う。

「あひっ、し、子宮が内側から……あふうんっ」

直腸から直接子宮に侵入した尻尾はそこでどぐるを巻き、先端は子宮口から飛び出し、膣を擦りながら体外に飛び出す。

「ひい、ひいひいッ。あらしのおま〇こ、と、子宮が、お姉さまの尻尾ちんぽで、お、犯されてるうううう！」

密着した膣を連結するように、コーティ自身の尻尾がコーティの膣穴を抉り、がんがんと激しく悪魔の子宮に激突する。

それら全ての淫らな行為が、いよいよ激しさを増していく。二人の全身からは、汗や涎、愛液などが飛沫となって岩肌を濡らす。

「らめえええええッッ！　こんなッ、こんな初めてだよおおおッッ。おねえさまあ、いくイクいくううッ」

「わたくしも……なんかすごい、来る……来ちゃいそうですうッ」

そのときだった。

ローゼリアの子宮内で蠢いていた淫魔の尻尾が、くねった拍子にずずんと「ある場所」を強く圧迫したのだ。

「ひゃうッッ!!　あ、ああッ、お、おひっこ出、でちゃうううううッッッ」

そこはビーチでさんざん冷たいものを飲んで、すっかり膨らんでいた、姫騎士の膀胱。

「あひ……ッ」

ぷしゃっ。びゅばばっ、どびゆるるるッッ。

勢いよく噴き出した聖水は淫魔娘の幼い尿道をダイレクトに抉り、クリトリスの包皮をめぐり上げ、膣穴に激突した。

「ふひひひひッッッッ！　おまつ、おま○こおおお、おひっこでぶち抜かれひゃううううッッ!!」

びくんっ、びく、びくくつっ。

コーティの両脚がバネ仕掛けのように持ち上がり、最大級のアクメに飲み込まれる。

骨盤が浮き上がり、ローゼリアの恥骨に勢いよく叩きつけられる。その衝撃をもろに食らったローゼリアも、一瞬遅れて巨大なエクスタシーのビッグウェーブに飲み込まれる。

「んあああああつ、クリちゃんとクリちゃんごつつんこで、いぐ、ヒグウウウウウウウ！」

互いの胸と胸をびったり密着させ、手足を絡めあつたまま、無双の姫騎士とサキュバス少女は快楽に酔いしれる。

「ふにやあああ、おねえさまあ〜」

「はあ、はあ……記録と記憶に残る、名勝負でしたわコーティちゃん」

シユウウウウウ……そのとき彼女たちの真下ではたつぷりと二人分の淫の気を吸収した第二の封印が解除されていた。

「くつくつく……これで残るは第三の封印のみ。さすが私の立てた計画は完璧、パーフェクト！ ワーッハッハッハッ……」

どこかで悪の魔導師が高笑いをしていたが、無論ローゼリアがそれに気づくことはなかった。

「あら……？ おかしいですわね、さつきまでこの辺にコーティちゃんがいたはずなのに」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>